

《翻 訳》

チョン・ソンジン

「レーニンの経済学批判」

太 田 仁 樹 訳

「レーニンを反復するということは、レーニンに復帰することを意味するのではない。レーニンを反復するということは、「レーニンは死んだ」という事実を認定すること、その特定の解法が失敗したということ、失敗でも、途方もなく失敗したという事実を認識すること、しかし、その中に救い出す価値があるユートピアの火花が存在するという事実を認識することである。レーニンを反復するということは、レーニンが実際にしたことと、彼が開いた可能性の領域を、レーニンから、彼が実際にしたことと、さらに別の次元、すなわち「レーニンの中にあるレーニン以上のもの」を区別しなければならない、ということの意味している。レーニンを反復するということは、レーニンがしたことを反復するということではなくて、レーニンができなかったこと、彼が逃した機会を反復するということである。」(Žižek, 2002: 310. 強調はジジェク)

1. 序 論

本稿は、レーニンの経済思想の展開過程に対する内在的検討を通して、マルクス主義経済学に対するレーニンの寄与を明らかにすることを課題にする。本稿は、レーニンの経済思想の展開に、不連続性と不均等性が存在することを立証するであろう¹⁾。特に、レーニンの経済思想において2大著作と言いつる『ロシアにおける資本主義の発展』(1899)(以後『発展』と省略)と『帝国主義論』(1916)との間の不連続性を強調するであろう。これを通じて、古典マルクス主義の伝統の経済学批判に対するレーニンの真正の寄与は『発展』ではなく、『帝国主義論』であるという点を究明するであろう。『発展』と『帝国主義論』の間には、第1次世界大戦以後の第2インターナショナル・マルクス主義の機械論的唯物論および経済決定論の問題設定との断絶があったことを指摘している。このような側面から『発展』の理論的・実証的・政治的問題点、特に『発展』でのレーニンの『資本論』理解がリカード主義的あるいは論理歴史主義的傾向を見せているという点を、指摘するであろう。さらに『発展』から『帝国主義論』に至るレーニンの経済思想の展開過程、すなわち「二つの道」の理論から「軍事的・封建的帝国主義論」を経て、「資本主義国家論」へと変遷する過程は、『発展』の自己批判過程であって、これはロシアにおける階級闘争の昂揚によって推動されたという点を明らかにするであろう。本稿は、『発展』に代表される青年レーニンの経済思想は高く評価しながら、『帝国主義論』は『発展』から理論的に後退していると評価するノーヴ(A. Nove)、ウォレン(B. Warren)、デサイ(M. Desai)等の通説的解釈²⁾とは正反対に、『帝国主義論』こそは『発展』が閉じ込められていた第2インターナショナル・マルクス主義の問題設定を突破したという点で、古典マルクス主義の

伝統を發展させたので、重要な寄与をおこなったことを示すつもりである。すなわち、第1次世界大戦以前のレーニンの経済思想は、カウツキー、ブレハーノフ、ロシアの合法マルクス主義のような第2インターナショナル・マルクス主義の問題設定を免れることができず、古典マルクス主義の伝統の経済学批判に対するレーニンの真正の寄与は、別の領域でと同様、第1次世界大戦の勃発以後の第2インターナショナル・マルクス主義との断絶とともに誕生して、『帝国主義論』はこの到達点であることが、本稿の重要な結論である。本稿はまた、このようなレーニンの第2インターナショナル・マルクス主義との断絶、および古典マルクス主義の伝統への復帰において、ヘーゲル弁証法の研究が決定的な契機であったことを指摘するであろう³⁾。ジジェク (Žižek, 2002) が指摘しているように、1917年2月の革命以後に噴出した革命的「狂気」の中で「4月テーゼ」と「国家と革命」によって象徴されるレーニン思想の精髓が誕生した⁴⁾。しかし、『帝国主義論』にも第2インターナショナル・マルクス主義の残滓が残っている点、革命のユートピア的「狂気」が鎮まるやいなや、その間は抑制されていた第2インターナショナル・マルクス主義の残滓が新経済政策 (NEP) 等の形態でまた生き返っているという点が、指摘されるであろう。終わりに、このようなレーニンの経済思想の問題点が、レーニンの死後今日に至るまで、進歩陣営で、スターリン主義的および改良主義的諸問題設定、例えば、資本主義の進歩性論、独占資本主義段階論、資本主義類型論 (「アングロ・アメリカ資本主義」vs. 「ライン資本主義」) 等を、助長してきた点を指摘するつもりである⁵⁾。

2. 『ロシアにおける資本主義の發展』 (1899)

レーニンの『發展』は、レーニンの著作中でもっとも本格的な経済学的著作である。レーニンの『發展』は青年レーニンのマルクスの『資本論』の研究とロシア経済史研究を集大成した大作である。レーニンの『發展』以後には、『帝国主義論』を除外するなら、『發展』に比肩する程度の、規模と深み、体系を有する経済学的著作を執筆することはなかった。『發展』は、マルクスの経済学批判の方法を現状分析に具体的に適用した著作として、マルクス主義を支持する立場からも、批判する立場からも、マルクス主義の経済学における重要な寄与として認定されている⁶⁾。

レーニンが『發展』で設定した課題は、ナロードニキに反対して、ロシアにおける資本主義の發展は可能であること、資本主義はすでにロシアに定着しているということを示すことであった。レーニンは、ロシアにおける資本主義の發展が可能であることを「市場理論」で証明して、ロシアにおける資本主義の發展が実際に進行してきたことを、膨大な統計資料の分析を通じて実証した。

レーニンの『發展』は、マルクス主義の経済学に対する重要な寄与であって、また、マルクス主義の歴史学の教科書だと見なされてきた。しかし、『發展』に理論的、実証的、および政治的に多くの問題点があるという事実は、既存の論議でさほど指摘されなかった。『發展』の問題点は、それが基礎をおいている市場理論に由来している。『發展』が基礎をおいている市場理論は、前資本主義経済から資本主義経済への移行の時期に、販路問題がどのように解決されるかを示す限定された問題を解決するための理論であり、社会全体の構造を解明する理論ではない。しかし『發展』はこの制限された目的を持った市場理論でもって社会全体の構造を解明しようと試みたために多くの問題が発生し

た。(太田仁樹, 1989: 第1章)

まず、資本主義的關係と伝統的な非資本主義的關係が対立的なものとしてのみ把握され、両者の相互依存、接合の關係をきちんと把握することが出来なかった。伝統的諸關係は資本主義的生産の發展の障礙物として、發展過程で駆逐されるものであると把握されている。伝統的關係とは、主に雇役制的地主制度とツァーリ体制を意味する。両者ともに前資本主義的關係だと見なして、その残存の程度だけが問題とされる。ツァーリ体制も、資本主義的地主經濟と區別される雇役制的地主層の利害を代表するもので、政治的には反民主主義的存在であり、經濟的には資本主義發展を阻害するものであると見なされていた。ロシアの資本主義は西欧と同質的なものであり、ただ西欧先進国の過去の發展段階に位置しているのだと把握されていた。資本主義的關係の發展はひたすら内在的觀點から把握され、その社会の特殊性は資本主義的關係が伝統的關係をどの程度駆逐したかによって把握された。すなわち、レーニンは『發展』で「先進国は後進国の未来像」という觀點を持っていた。けれども、このような觀點からは、後發資本主義社会の特殊性を把握することが困難である。『發展』では政治的には民主主義、經濟的には資本主義を指向する諸勢力(ブルジョアジー+農民+プロレタリアート)とそのような歴史の進歩に対する障礙物であるツァーリ体制とその雇役制的地主層の対抗が、ロシア社会における重要な対立として設定されていた。『發展』の時期のレーニンが構想した革命戦略は、このような資本主義の發展の妨害物の除去を目標とするものであった。

けれども現実には、地主制は資本主義的再生産構造の一環として包摂されていたのであり、ツァーリ体制も資本主義の發展を、妨害というよりも、推進した。レーニンは、『發展』において、資本主義には民主主義的な政治制度が照応し、前資本主義的關係は資本主義の發展の妨害物で、結局駆逐されると考えていたので、専制的国家権力と資本主義的の結合、すなわち地主制(雇役制)を基礎とする独特の再生産構造を形成しているロシア資本主義の実態をきちんと理解することができなかった。

『發展』で、レーニンは市場の發展と資本主義發展を同一視して、資本主義の發展程度を過大評価した(Howard and King, 1989: 178)。この点は、特に農村の地主經濟の評価において目立っている。レーニンは、商品と貨幣經濟が發展している地主經營の相当部分を資本主義經濟と見なした。

『發展』は、農奴解放以後の時期のロシアの農村經濟についての一種の「スナップ写真」であるといえる。すなわち『發展』には数多くの統計資料が動員されていたが、時系列分析はほとんどなく、横断面分析に終始していた。それゆえに、ロシアの農村に以前から存在していたものが何か、新しいものが何かを、『發展』は論ずることができない。

『發展』は、村落共同体(obshchina)の構造と動学、および村落共同体が1861年の農民解放以後の農民の經濟状態にどのような影響を及ぼしたかを、分析していなかった。「レーニンの本を読んでも、われわれが当時のロシアの農民たちの大多数が村落共同体に暮らしていたという事実は、わからない。」(White, 2001: 43)『發展』は、歴史書として当時のロシアの經濟關係について不十分であり、一面的な觀察である。1890年代以来、レーニンはもっぱら農民層分解の進展だけを資本主義發展の指標と見なし、ロシアで農民共同体が分解していると主張した。レーニンはそのような考えに基礎を置いて自身の農業政策を定式化した。けれども、最近のロシア經濟史研究は、レーニンがその本を書いて以来20年が過ぎた1917年革命当時にも、農民共同体が依然として活力を持っていて、敵対的な

諸階級に分解しなかったことを示してくれる。村落共同体内部における階級分解は、レーニンが主張したほどに進行しなかった。ある研究によれば、レーニンが『発展』を執筆した時期である1892年のロシアにおける総耕地の実に43パーセントが共同体の統制の下にあった (Zarembka, 2003: 285)。すなわち、レーニンはロシアの村落共同体の堅固さを過小評価した反面、農民層分解の進展程度、農業資本主義の発展程度を、過大評価したのである (Howard and King, 1989: 179)。

同様に『発展』の問題設定は、非常に一国的である。『発展』は、国内の経済発展の分析に排他的に焦点を合わせていて、ロシアにおける外国資本の問題はほとんど論議していない。『発展』全体でたった二つの文章でだけ外国資本が言及されている (White, 2001: 43)。その結果、当時のロシアにおける資本主義の発展の重要な源泉の一つが無視されていた。これはロシアで近代機械工業の発展程度を過小評価することでもある。なぜならば、当時の機械工業は大部分外国資本によって建設されていたからである。レーニンが『発展』で、工場、工業の役割を軽視して、農村での資本主義の発展と農民層分解を特権化したのは、この時期の論争でレーニンとおおむね同じ理論的立場を示していた合法マルクス主義者のトゥガン・バラノフスキイが『19世紀ロシアの工場』(1898)で、ロシア資本主義の発展を、工場、工業を中心として説明して、ロシアの資本主義の発展における国家の役割を重視したのと対照される。ナロードニキのボロンツォフさえも、『ロシアにおける資本主義の運命』(1882)で、ロシア資本主義の発展における外国資本と国家の役割を強調した。同じ時期のトロツキーが『評価と展望』(1905)で主張した不均等結合発展論は実証的側面では『発展』より貧弱であるが、その問題設定は『発展』より正確である。トロツキーは、ロシアにおける資本主義発展の不均等性と国家の主導的役割を強調した。トロツキーは、ロシアでは国家が積極的に工業化を主導する国家主導的資本主義発展が成し遂げられていると示した。彼は「ロシアの資本主義は、国家の子どもだと思われる」(Trotsky, 1905: 37)と書いた。レーニンの場合、分析水準が多分に一国的であり、農村での農民層分解、農業での資本主義の発展に焦点を合わせたことに比して、トロツキーは、世界的視野でロシアの資本主義の発展における国家と外国資本が果たした役割と、当時の工業での資本主義発展を正当に強調した⁷⁾。同様に、トロツキーは、『1905年』(1909)でも、ロシアにおける脆弱な国内ブルジョアジーとツァーリ体制および外国資本主義の結合発展、当時の工場地帯における労働者の類例のない高度の集中に注目した (Trotsky, 1909: 20-23)。

1861年の農民解放以来のロシアの専制権力が、その野蛮性にもかかわらず、資本主義の発展における大きな役割を果たしたという事実についての認識は『発展』にはまったく見られない。レーニンは資本主義が伝統的関係と全面的に対立して、資本主義発展は伝統的なものを駆逐する過程であると考えているからである。

レーニンは『発展』でこのような市場理論的社会認識を基礎として、「切取地 (otrezki)」農業綱領、すなわち地主に対する攻撃を切取地⁸⁾に制限して、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争を抑制する戦略を導出した⁹⁾。『発展』の時期のレーニンの農業綱領での地主に対する攻撃は全面的なものではなくて、部分的なものにとどまった。すなわち、地主の所有地のうち切取地だけを返還の対象として要求した。レーニンは、切取地が「債務奴隷的賦役の労働」、すなわち事実上農奴制的労働を継続維持する基盤になっていたと見て、切取地の村落共同体への返還を要求した。切取地を通

り越した地主的土地所有に対する攻撃は制限された。レーニンがこのように地主的土地所有一般に反対せず、地主の切取地所有にだけ反対するのは、切取地以外の土地は農奴制でなく、ブルジョア的・資本主義的に利用されていると考えていたためである。『発展』の時期のレーニンは、当面の革命の性格を歴史の発展に対する「障害物」を除去することだと設定していたために、歴史を発展させる側であるブルジョアジーに対するプロレタリアートの攻撃は抑制されなければならないと考えた。

19世紀末のロシアの社会経済状態についてのレーニンの『発展』における分析がマルクス主義的であり、ナロードニキの分析は非マルクス主義的であるという通説的評価は正当でない。レーニンとは違って、晩年のマルクスはロシアの村落共同体を非常に真摯に検討した。晩年のマルクスはレーニンとは違ってロシアにおける農民層の分解を資本主義発展の中心指標と見なさなかった。晩年のマルクスは「ヴェーラ・ザスーリチ (Vera Zasulich) に送った手紙草稿」(Marx, 1881b) で見るように、ロシアの合法マルクス主義者たちや、レーニンとは反対に、ロシアに残っている村落共同体を基盤として、資本主義を飛越して、社会主義に直接移行しようとするロシアのナロードニキたちに共感を表示した。それゆえ、White (2001) も指摘したように、ナロードニキとマルクス主義を二分法的に対立させることは、当時のロシア思想の現実とは符合していない。元来の意味でのナロードニキがマルクス主義の影響を受けなかったことはなくて、プレハーノフをはじめとする初期のロシア・マルクス主義者たちは、ナロードニキであった。

3. 『発展』と『資本論』解釈の問題点

レーニンの『発展』はマルクス主義の歴史学研究においてだけでなく、マルクス主義経済学研究においても、里程碑的成果を達成したものと評価されている。すなわち、『発展』で提示されている市場理論と第1部門の不均等発展法則は、当時のマルクス主義者たち内部で展開されていた再生産と恐慌論争を、マルクス主義的立場から正しく解決したものだと言われている。

しかし実際には、「消費の一定の水準自体が比例性の一つの要素」という警句的言及¹⁰⁾を除外すれば、レーニンがマルクス主義の再生産と恐慌理論に独自に寄与したことはほとんどない。レーニンの恐慌理論は、ナロードニキの過少消費説と合法的マルクス主義者の不比例説を弁証法的に解決した独創的貢献であるというスターリン主義的レーニン偶像化は、拒否されねばならない。

事実、「消費の一定の水準自体が比例性の一つの要素」というレーニンの言及自体が、マルクスの再生産と蓄積理論を誤解したものである。なぜかというマルクスは生産と消費の乖離を、レーニンの主張するように「資本主義的生産全体の一部門」(Lenin, 1897: 168)ではなくて、資本主義的生産全体の重要な属性だと見たからである。

レーニンが実現問題に起因する恐慌の問題を不比例問題に還元して、恐慌論を再生産表式論で代替したことは、レーニンがマルクスの経済学批判体系を誤って理解したことである。ロスドルスキーは、レーニンがマルクスを誤読した結果、ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』を棄却して、パウアー (O. Bauer) のようなオーストロ・マルクス主義のローザ批判を受容することになったと指摘している¹¹⁾。さらにレーニンがローザを批判しつつ提示した資本の有機的構成の高度化を考慮した拮

大再生産表式は資本主義経済での技術革新が調和的に進行することができるという間違っただけの印象を与えている。

実現問題についての理論において、レーニンと他の合法マルクス主義者たち、すなわちトゥガン・バラノフスキー、ブルガーコフ、ストルーヴェの間の差異は大きなものではない (Zarembka, 2000: 204)¹²⁾。ロスドルスキーが指摘するように「生産と消費の関係が均衡概念に包摂されうるというレーニンの仮定は、彼をブルガーコフやトゥガン・バラノフスキーの不比例性に、危険なほど近く接近させている。」(Rosdolsky, 2003: 243)

レーニンは『資本論』第3巻の、特にそのなかでも利潤率の低下傾向法則を過小評価している¹³⁾。またレーニンの資本蓄積概念は生産力の側面を絶対化して、生産の社会的関係の側面、階級関係の側面を最小化しているという点で、マルクスの資本蓄積概念についての一面的理解である (Zarembka, 2000: 185)。資本蓄積を資本主義的階級関係の蓄積、プロレタリアートの増大だと認識していたマルクスとは違って、レーニンは青年の時期にも、また円熟した境地に到達した1915年にも、資本蓄積を生産の拡大とだけ理解する偏向から逃れることが出来なかった¹⁴⁾。

ザレンブカが指摘したように、「レーニンは資本主義的生産の拡大が自身の市場を創出し、消費財に対する需要は派生需要であると主張して、リカードゥのように生産の組織者としての資本家を浮き彫りにしている」点で、リカードゥと同じく「生産の経済学」に退行した (Zarembka, 2003: 288-289)。マルクスの『剰余価値学説史』にシスモンディに対するどのような積極的な批判も展開されていないのと違って¹⁵⁾、レーニンはシスモンディをナロードニキ経済学の元祖と見なして、残酷に批判した。レーニンは「プチブルジョア」経済学者シスモンディに対しては実に133ページに達する長文論説全体、すなわち Lenin (1897) を割いて批判しつつも、「ブルジョア」経済学者リカードゥの誤謬についてはほとんど沈黙した。

レーニンは「いわゆる『市場問題』について」(1893)と『発展』で市場あるいは商品生産一般を資本主義と同一視して、市場が形成発展すれば資本主義が自動的に成立するように理解する流通主義的偏向を示した。「レーニンは、市場創出における強制の問題を過小評価して、技術進歩の役割を浮き彫りにした。」(Zarembka, 2003: 284) レーニンは前資本主義経済が市場の力を通して資本主義に自然に転化すると信じていた点で、資本の原始的蓄積過程での暴力、経済外的強制を強調したマルクスと違って、むしろアダム・スミスに近い。レーニンは商品生産を創出する場合に強制と暴力に焦点を合わせるよりも、市場の規模は「社会的労働の特化の程度と不可分に連関している」と述べて、「このような特化は本質的に技術進歩と同様に無限である」と主張した (Lenin, 1893: 100)。

レーニンはまた、第2インターナショナル・マルクス主義とスターリン主義に痼疾的な『資本論』についての論理歴史主義的理解に対して、「伝統的」典拠を提供した。レーニンが『資本論』を論理歴史主義的に理解していることは、次のような主張で明らかである。「何らかの所与の歴史的に規定された社会の生産関係を、その発生、発展および消滅過程の全体に及んで研究すること、これがマルクス主義経済学説の内容である。」(Lenin, 1914b: 59)¹⁶⁾

その上、レーニンは新リカードゥ主義の経済学者たちと同様に、価値形態および物神性範疇の重要性をきちんと認識できなかった。これはマルクス以後の大部分のマルクス主義者たちと新リカードゥ

主義の経済学者たちがマルクスから価値の量的理論と価値形態論、物神性論および疎外論の有機的統一を理解できなかったのと同様である。すなわち、レーニンはベルンシュタインやカウツキー、ヒルファーディング、ローザと同様に、価値形態と物神性および疎外論をマルクスの価値論の中心概念に位置づけることができなかった。第2インターナショナル・マルクス主義の文献にはほとんど登場しない価値形態や、物神性、疎外のような諸範疇は、レーニンの文献にも登場していない。

もちろん1914-1915年のレーニンがヘーゲルの『論理学』を穿鑿して作成した『哲学ノート』は、レーニンがマルクスの経済学批判体系についての自身の昔の解釈の枠を壊すことができる方法論を確保したことを示している。例えば、レーニンは『唯物論と経験批判論』の反映論とは異なって、『哲学ノート』では本質と現象形態の乖離に注目していたが¹⁷⁾、これがマルクス経済学批判体系と接ぎ木されていたら、価値形態と物神性、疎外範疇の重要性を認識することができたであろう。しかし、1917年革命の勃発により、レーニンがこれに必要な時間を持っていないことになった。

4. 「二つの道」, 「軍事的・封建的帝国主義」からブルジョア国家へ

1) 「二つの道」: 1905-1914年

『発展』におけるレーニンは、資本主義的關係と伝統的關係の關係を、もっぱら対立的なものだけ把握して、両者の結合、相互依存と接合の側面を把握できなかった。そのために、この時期のレーニンは、農民の地主に対する闘争力をきちんと評価することができず、彼が提起した切取地綱領は1905年革命において農民運動の実際的展開に追いつくことができなかった。だがレーニンは、1905年革命期に農民が地主の土地を全面没収した現実を目撃して、以前に主張していた切取地綱領を撤回して、代わりに地主の土地の全面没収を主張するようになった。レーニンは、1905-1907年の第1次ロシア革命における農民運動の拡散、地主制が資本主義発展に従って消滅することはないという事実、地主の代表者と見なされたツァーリ体制の政策が資本主義化の推進であったという事実等を知るようになった。レーニンはこれを反映して、『民主主義革命における社会民主主義者の二つの戦術』(1905)において、農民階級の革命的能力を以前より高く評価すると同時に、ブルジョアジーの革命遂行能力の評価切り下げをおこなった。「[ツァーリ体制+地主] 対 [プロレタリアート+農民+ブルジョアジー]」という構図に代わって「[ツァーリ体制+地主+ブルジョアジー] 対 [プロレタリアート+農民]」という階級対抗の構造認識の基礎の上にプロレタリアートと農民階級の権力が展望される。このようなレーニンの新しい認識は、『1905-1907年の第1次ロシア革命におけるロシア社会民主党の農業綱領』(Lenin, 1907)において「二つの道」の理論として具体化された¹⁸⁾。

「二つの道」の理論は市場理論のような部分的理論ではなく、ロシア社会全体の構造に関する認識である。「二つの道」の理論で、レーニンは地主制およびツァーリ体制とロシア資本主義の結合を「農業資本主義化のプロイセン型の道として把握して、それに対抗する農民的発展を「アメリカ型」として把握した。「プロイセン型」と「アメリカ型」の対抗は農業部門だけではなく、工業部門でも成り立ち、このような相互対抗する「二つの道」がロシアで共存していることは、ロシア社会の発展水準が低いためであると、レーニンは考えた。「プロイセン型」の資本主義発展と「アメリカ型」の

資本主義発展という、二つの資本主義化の道が対抗している状態がロシア社会の現状であるというのである。すなわち、「アメリカ型」の資本主義発展を指向する農民およびプロレタリアートが、「プロイセン型」の資本主義発展を指向する「ツァーリ体制+大ブルジョアジー+地主層」と対抗しているのである。この場合、ツァーリ体制と地主層は政治的な反民主主義傾向にもかかわらず、経済的に進歩的勢力であると把握される。すなわち、対立は歴史の進歩の推進者とその障害物の間の対立ではなく、進歩をめぐる二つの流れ、すなわち「プロイセン型」の道と「アメリカ型」の道の間の対立として把握された。レーニンはその当時「プロイセン型」資本主義の発展の道を歩んでいったロシアに対し、「アメリカ型」資本主義発展の道を対案として提示した¹⁹⁾。

しかし「二つの道」の理論は次のような問題点を持っていた。まず「二つの道」の理論は「二つの道」の間の相互対抗の側面を誇張する反面、相互接合の側面は過小評価している²⁰⁾。これは「二つの道」の理論が、『発展』と同じく、ロシアにおけるツァーリ体制のような前資本主義的諸関係が資本主義と結合しているということは、ロシアが近代社会が成立する前の状態にあるためであるという論理を背景としているためである（太田仁樹、1989：第3章）。その結果、「二つの道」の理論もまた『発展』と同じく農民の反地主闘争と労働者の反資本家闘争の拡散をもたらす近代ロシア社会の独自の構造、すなわちツァーリ体制における地主制を再生産構造の一環として包摂しつつ発展するロシア資本主義の独自の構造を把握することができなかった。

「二つの道」の理論では、反民主主義的關係の存在は資本主義の発展程度の低さに照応するという図式がなお克服されていない。レーニンはツァーリ体制主導の資本主義発展を「プロイセン型」と呼んでいることから見るように、プロイセンを先進西欧資本主義の国と違う発展を経験していると見なした。だがその社会の性格は本質的に西欧資本主義の国と同一なのだと見なしている。資本主義がすでに確立したプロイセンの構造を、レーニンは「ブルジョア的=ユンカー的君主制」と呼んだ。レーニンはどのような社会でも資本主義が本格的に確立した後は、基本性格について西欧資本主義国と差異がないと考えた²¹⁾。

レーニンは「二つの道」の理論でも、資本主義発展は民主主義発展と同時に進行すると考えていて、後発資本主義国では、専制的な統治形態がむしろ資本主義的工業化に有利な形態でありうることを認定できなかった。「二つの道」の理論で、政治的民主主義の課題はあくまでも資本主義の成立期の課題である。

「二つの道」の理論はツァーリ体制・地主制と結合した資本主義発展に反対する広範囲な農民運動の存在根拠を資本主義の発展水準が低いという事実求めた。このために「二つの道」の理論はロシアにおける先鋭化する労働運動の存在を説明するのが困難になって、1905年革命当時レーニンの提起した「プロレタリアートと農民による革命的民主主義独裁」戦略、すなわちプロレタリアートと農民の直接的政権獲得という政治的展望とは矛盾することになった。

『発展』に対応する農業綱領が切取地綱領であるとすれば、「二つの道」の段階のレーニンの農業綱領は土地国有化綱領であった。レーニンは「アメリカ型」の資本主義発展を指向する革命勢力は「プロイセン型」の資本主義化の担当者である地主制全体を打倒して、地主的土地所有一般を撤廃して土地を国有化しようという戦略を提起した。レーニンは土地国有化の基礎によってのみ「アメリカ

型」の資本主義的發展が展望でき、その意味で土地国有化はブルジョア的なものだと考えた。すなわち土地国有化綱領は最大綱領ではなく、資本主義の枠内で成就できる綱領であり、絶対地代の除去を通じて資本主義の自由な發展を促進する²²⁾。したがって、土地国有化は第1段階の革命、すなわち反封建革命と両立可能である。このような諸点も推しはかってみると、1905年革命以後1917年革命まで、レーニンは相変わらず2段階革命論者であった(Howard and King, 1989: 201)。

2) 「軍事的・封建的帝国主義」から「資本主義国家」へ：1914—1917年

第1次世界大戦の時期、レーニンはロシアの前近代的勢力を「軍事的・封建的帝国主義」という概念で把握した。「二つの道」の理論ではツァーリ体制・地主と結合した資本主義化を「プロイセン型」と規定して、それに反対する農民運動を「アメリカ型」を指向するものだと規定したが、「軍事的・封建的帝国主義論」では、ツァーリ体制・地主に反対する農民運動を「ブルジョアのロシア」と呼んだ。レーニンは「軍事的・封建的帝国主義」が「資本主義的(ブルジョアの)帝国主義」と併存しているのが、第1次世界大戦以後のロシアの現実であると認識した。レーニンは「第2インターナショナルの崩壊」(1915)において、「周知のようにロシアでは資本主義的帝国主義は弱い、その代わり軍事的・封建的帝国主義はより強力である」(Lenin, 1915a: 228)と書いた。

「軍事的・封建的帝国主義論」は他の帝国主義列強と比較して、ロシアの前近代性を強調するが、ロシアにおける資本主義的帝国主義、独占資本主義、さらに国家独占資本主義の形成を認定している。すなわち「軍事的・封建的帝国主義論」ではロシア社会が資本主義以前の前資本主義社会だという論理は放棄されている。しかし、農民運動をブルジョア民主主義運動だと見なして、そのエネルギーを活用するための根拠として提出された「二つの道」の理論の目的は、「軍事的・封建的ロシア」から「ブルジョアのロシア」を解放するという論理で継承されている²³⁾。「ブルジョアのロシア」に対抗するツァーリ体制と地主制は『發展』で同じく「農奴主的」なものとして見なされていた。しかし「軍事的・封建的帝国主義論」では、地主とツァーリ体制が「農奴主的」と指称しつつも、『發展』においてとは違って、資本主義發展を阻害するものだと見なされてはいなかった。「農奴主的」ツァーリ体制・地主は資本主義の妨害物や、資本主義發展により駆逐されるものではなく、すでに帝国主義に成長転化した資本主義、すなわち「資本主義的帝国主義」と共存しているものだと把握されている。

「二つの道」の理論では、ツァーリ体制・地主と結合した資本主義が發展しているロシア社会を資本主義が本格的に確立する前の社会だと見ていたために、当時徐々に激化していた労働運動を説明することが困難だった。しかし、「軍事的・封建的帝国主義論」ではツァーリ体制・地主(「軍事的・封建的帝国主義」と共存する資本主義を「最新型の資本主義的帝国主義」あるいは「ブルジョアの帝国主義」と把握して、二種類の「帝国主義」の同時存在から労働者と農民の革命的エネルギーの結合の根拠を求めることができた(太田仁樹, 1989: 第6章)。

1917年10月革命後、レーニンは近代ロシアの出発点を1861年の農民解放の時点に求めて、以後のロシア国家を資本主義国家と規定した。「1861年まではロシアを統治していた国家権力は農奴制的地主だったことは、われわれは知っていた。それ以後、統治してきた権力は大概の場合ブルジョアジーで

あり、富裕な層の代表者だったことをわれわれは知っていた」(Lenin, 1919:393)。ところがこのような資本主義国家論は、1917年の革命以前のツァーリ体制を「前近代的」なものだと見なしてきた自身の従来の論議を真っ向から覆すものである。ツァーリ体制はブルジョア権力である臨時政府と同質的なものと見なされている。さらに地主制は「資本に対する最も無慈悲な革命的措置をとらずには」廃棄することができない程度に資本主義と緊密に結合しているものだと認識されていた²⁴⁾。すなわち、2月革命以前の「農奴的地主」と革命以後の「資本主義的地主」が実質的には同一の社会層だと見なされた。すなわち、「軍事的・封建的帝国主義論」での「ツァーリ体制＝農奴制的」という認識は消え去っている。ツァーリ体制は「農奴制の残存物」である地主制も包含したロシア資本主義の再生産を総括する位置にあるものとして再び規定された。全体的国家権力は地主勢力にだけ基盤を持つものではなく、相対的自立性を持つものだと把握された。「ツァーリ＝ブルジョア権力論」における全体権力は資本主義発展の推進者として認識された。すなわち、ロシアの地主制は「前資本主義的」なものであるが、ツァーリ体制は「ブルジョア的」なものであると見なされ、両者はもうこれ以上調応しなくなっている。ツァーリ体制に単に地主制の代表者としての地位だけではなく、地主制を一環とするロシア資本主義の再生産を総括する地位が付与されたためである。

レーニン「さしせまる破局、それとどうたたかうのか」(1917.9.)においてツァーリ体制における資本主義がすでに独占資本主義、国家独占資本主義に成長転化したと主張している。「ロシアでも資本主義がもう独占資本主義になったという事実はプロドウーゴリ、プロダメト、砂糖シンジケート等の事例によって十分に立証された。この砂糖シンジケートは独占資本主義が国家独占資本主義に転化する方式を示しているよい事例である(Lenin, 1917b:361)。レーニンは、さらにツァーリ体制と臨時政府の同質性も主張していた。「君主制の統治形態が共和制的な民主主義的形態に変わっていても、資本主義的搾取の経済的本質は少しも変わっていない。したがって、逆に民主的共和制の下でも、闘争の形態だけが変更するにすぎない。」(Lenin, 1917b:329) すなわち、1917年2月の革命で統治形態が変更したのは、資本主義に対して本質的な意味をもたないというのである。さらに述べて、ツァーリ体制という全体統治が資本主義に対してそれ以上障害物ではないのである。これはツァーリ体制を資本主義の発展の障害物である見た『発展』におけるレーニンの認識とは完全に相反している。

1861年以後のロシア国家を資本主義の国家と見る革命後のレーニンの観点は、ロシアの状態を先進資本主義国の過去の一発展段階と等値した従来の発想とはまったく異なったものである。今のロシアにおける後進性の存在はロシアが資本主義以前の状態にあることを示す証拠ではなく、ロシア的近代の特質を示すものだと認識される。また資本主義に対して「無慈悲な」打撃を加えることなしには、土地私有を廃棄することができないという程度に地主制が資本主義的再生産のメカニズムに深く編入されているという1917年革命後のレーニンの認識は、地主制の廃棄が資本主義の順調な発展を促進するという「二つの道」の理論と相反するもので、「軍事的・封建的帝国主義」から「ブルジョアのロシア」を解放しようという第1次世界大戦の時期のレーニンの主張とも相容れないものである。1917年革命以後、レーニンは、地主制の廃棄がそれ自体で資本に対する打撃であると考えようになった。

要するに、レーニンのロシア社会認識は、1917年革命後「旧ロシア＝資本主義国家論」, 「ツァーリ＝ブルジョア国家論」へと移行した。これは『発展』における、ロシアにおける資本主義的關係と前資本主義關係の間の矛盾の側面および資本主義の進歩性を強調することから、両者の接合の側面と資本主義の反動制を強調することへの移行である。1905年革命後のレーニンの「二つの道」の理論や、「軍事的・封建的帝国主義論」は、このような移行の過程の諸理論であり、レーニン自身が1917年革命以後廃棄したもので、ハワードとキングのように、その理論的意義を誇張してはならない²⁵⁾。

5. 第2インターナショナルの崩壊とレーニンにおける「認識論的断絶」

1914年の第1次世界大戦の勃発とともに、第2インターナショナルが祖国防衛主義に旋回するやいなや、レーニンは1915年スイスのツィマーヴァルトで開かれた国際社会主義者大会で、第2インターナショナルの破産を宣言して、新たなインターナショナルの建設を提唱した。レーニンは社会民主党指導部の背信と機械主義が第2インターナショナルの破産を招来したと主張した。レーニンは、戦争という非正常的時期を早く終結させて、正常状態に戻すというカウツキーの平和主義に対して、戦争を階級闘争の一部と把握して、戦争を革命的状態への跳躍台として利用しなければならないと主張した。すなわち、レーニンは政府の敗戦を煽動・組織し、戦争を内戦に転化させて、社会主義革命に進むという「革命的敗北主義」を主張した。レーニンは帝国主義間戦争において交戦する各帝国主義国家の人民たちが他の帝国主義国家の人民たちに向けている銃口を、そのように向けるよう使喚している自身と同じ民族の自国支配階級に向けるよう促した。レーニンはロシアでの「ツァーリ王政とその軍隊の敗戦は……次悪なので」(Lenin, 1914a: 18)あり、革命的敗北主義の支持如何が真正の社会主義者を判別する試金石でなければならないと主張した。

しかし、レーニンは1914年以前には、第2インターナショナル・マルクス主義の一員だった。1914年カウツキーを背叛者と規定したレーニンは、自身が1914年以前にはカウツキーを正統マルクス主義者と崇めていた事実に見るように、1914年以前には、カウツキーとレーニンの間にどのような本質的差異も存在しなかった。実際、社会主義的意識は外部から階級闘争に導入されるしかなく、自生的には形成されえないというレーニンの「何をなすべきか」(1902)の重要結論は、カウツキーの同一の主張を反復したものである。1914年以前のレーニンは、ドイツ社会民主党内の論戦でも、ローザ・ルクセンブルクのような左派の立場に同意しなかった。例えば、1908年にレーニンは、戦争勃発即時の総罷業と暴動を組織しようというヘルヴェ (Hervé) の提案を「とんでもない誤謬」だと批判したカウツキーに対して「そのとおりだ」と支持した (Lenin, 1908: 196)。「レーニンはその師父であるカウツキーの立場とほぼ変わらない比較的穩健な中道左派の立場をとった。」(Harding, 1996: 72)²⁶⁾レーニンは、1914年8月4日の当日に社会民主党が戦争公債案に賛成したというニュースを得たとき、これを信じようとしなかったという事実は、当時のレーニスが、どんなに第2インターナショナル・マルクス主義の問題設定に深く閉じ込められていたのかを、よく示している。

さらにレーニンは自身を少なくとも1914年までは「ロシアのカウツキー」であるプレハーノフの哲学的弟子だと考えていた。レーニンは初期の著作『人民の友とは誰か?』(1894)はプレハーノフの

影響を分明に示している。1917年革命以前のレーニンを含む当時のロシア社会民主党の指導者たちは、近づくロシア革命がブルジョア革命であるだけでなく、ロシアにおける社会主義革命はブルジョア革命を経過した後に遂行せざるをえない、という第2インターナショナル・マルクス主義の2段階革命論を、特別に疑問なく受容した。レーニンとボリシェヴィキが、プレハーノフやメニシェヴィキとの差異を示したのは、ただこのようなブルジョア革命を遂行する過程でどの階級が指導的役割を遂行しなければならないのかという問題をめぐるものであった。1914年以前、レーニンの最も重要な政治著作の一つである『民主主義革命における社会民主主義者の二つの戦術』で、レーニンはロシア革命のブルジョアの性格を主張して、資本主義発展以外の別の方法で労働者階級の救援を求める考えは反動的だと批判した。ロシアの経済発展水準とプロレタリアートの階級意識と組織化水準のために、労働者階級の即刻の完全解放を果たすことはできず、このためにさしせまる革命はブルジョア的性格を持たざるをえないことが、当時のレーニンの考えだった。このようなレーニンの主張において、客観が主観を決定して、経済が意識の条件になるという第2インターナショナル・マルクス主義の機械的唯物論、経済決定論の影響が分明に示されている（Löwy, 1990: 第2章）。

しかしレーニンは、1914年の第1次世界大戦の勃発とともに、第2インターナショナルが崩壊したと宣言して、第2インターナショナル・マルクス主義に対する全面的批判に着手した。レーニンはこのための方法論的基礎をヘーゲルの弁証法に求めた。レーニンは第1次世界大戦の激動期にベルン公立図書館でヘーゲルの『論理学』研究に没頭した。「レーニンをレーニン主義に引き入れたのは、まさしく第1次世界大戦であった。」（Harding, 1996: 78）レーニンはヘーゲル『論理学』の弁証法を領有することで、ロシアの物質的・客観的条件は社会主義革命を遂行することができる程度に十分に成熟できていないという第2インターナショナル・マルクス主義の前弁証法的な機械的唯物論と断絶して、トロツキーの永久革命論を受容することができた²⁷⁾。レーニンが1917年4月「すべての権力をソヴェトへ！」というスローガンで象徴される「4月テーゼ」を宣言することで、トロツキーの永久革命論と邂逅し、これを通して「10月への道」を開く跳躍を可能にした決定的契機は、1914年以後ヘーゲル弁証法の再発見だった²⁸⁾。

6. 『帝国主義論』の意義と限界

レーニンは『帝国主義論』で、19世紀中盤の産業革命以後の英国で確立された資本主義が、19世紀末から20世紀初を境界として、新しい発展段階へ移行したと主張した。レーニンはこの資本主義の新しい発展段階を帝国主義と規定して、その歴史的地位を独占資本主義、寄生的で腐敗した資本主義、死滅しつつある資本主義と要約した（Lenin, 1916）。

レーニンの『帝国主義論』の合理的核心は、資本主義の不均衡発展の進展とこれにともなう国民的資本と諸国民国家間の経済的・政治軍事的競争の激化による帝国主義間戦争の必然性と、「弱い環」²⁹⁾で形成される革命的情勢を理論化したことである。レーニンの『帝国主義論』はまた各々の社会の特殊性を資本主義の発展水準に還元した『発展』の時期の世界認識の限界を克服したことである。レーニンは『帝国主義論』で資本主義世界体制を経済的・政治的に多民族を抑圧している列強と抑圧され

ている植民地・従属国から構成された位階的構造で理解した。さらにレーニンは、『帝国主義論』で自由競争から独占への転化という論理によって、高度に発展した資本主義と政治的・社会的反動性の結合を説明しようとした。これは資本主義の発展を進歩的なものと評価した『発展』でのレーニンの資本主義観とは相反する。自由競争から独占資本主義への移行が民主主義から政治的反動への転化を招来するという『帝国主義論』の論理は、資本主義社会での非民主主義的なものを資本主義的発展の未熟さと結びつけて理解しようとした『発展』の時期の経済決定論的発想を克服したのである。以上のような認識の転換によって、レーニンは帝国主義戦争の社会経済的背景を説明して、自国政府の敗北を通じた労働者革命の遂行という「革命的敗北主義の戦略」を理論的に基礎づけることができた。

レーニンが『帝国主義論』で遂行した資本主義の世界体制の不均等発展の位階的構造の理論化、資本主義の反動性の再認識、経済決定論の克服は古典マルクス主義の伝統の経済学批判に対する画期的寄与だといえる。従ってレーニンの『帝国主義論』がマルクス主義の経済学にどのような革命的な寄与もないという評価³⁰⁾は正当ではない。

しかし、レーニンの『帝国主義論』はこのような画期的意義にもかかわらず、重要な欠陥を持っていた。これは相当部分『帝国主義論』でも完全に清算されずに残っている第2インターナショナル・マルクス主義の問題設定に縁由している。実際に、株式会社、カルテルとトラストの『発展』、所有と統制の分離、漸増する「生産の社会化」、および「資本の民主化」等、第2インターナショナルのヒルファーディングの『金融資本論』に中心的な諸主題が、1917年のレーニンの『帝国主義論』の主題を構成していた。レーニンの『帝国主義論』はヒルファーディングの『金融資本論』の独占段階への移行の論理をそのまま受け入れて体系化した³¹⁾。

レーニンは帝国主義を資本主義の一発展段階、すなわちいわゆる独占資本主義段階の現象だと理解したが、帝国主義はむしろ資本主義の歴史とともに作動している資本主義に具有する歴史的傾向だと理解されなければならない。レーニンと違って、マルクスは独占と帝国主義を競争の制限ではなく、新しい形態の激化した競争、すなわち経済の新しい形態だと理解した³²⁾。帝国主義の独占資本主義段階論的解釈はマルクスの資本主義概念と対立せざるをえず、現代資本主義の現実とも符号しない。レーニンはヒルファーディングの金融資本概念をほぼ全的に受容したが、これは生産資本と貨幣資本の融合という同時代のドイツ資本主義の経験の特権的に一般化したのであって、生産資本と貨幣資本の分離を特徴とする今日の金融世界化の条件の資本主義を説明するのが難しい。

レーニンの帝国主義論は資本主義社会の正常的姿態を19世紀中葉の資本主義だという思考方式、すなわち「19世紀特権論」を内包していた（太田仁樹、1989：第4章）。レーニンはヒルファーディングにすでに内包されていた「19世紀特権論」を受け入れた結果、資本主義の発展傾向を正しく認識することができなかった。レーニンは独占資本主義の理論化に不可欠な独占と超過利潤の理論的関連の問題、独占資本主義における価格と賃金理論の問題を解明できず、このためにレーニンの労働貴族理論とそれに基礎を置く改良主義批判は相当な理論的難点を持った。レーニンは労働運動での機会主義、改良主義の隆盛を資本主義の終末期での労働者階級の一部分が独占資本主義の超過利潤で買収された結果である時代的・階層的な例外性だと把握した³³⁾。

さらにレーニンの『帝国主義論』には、帝国主義の「歴史的地位論」において見るように資本主義

に固有の力動性を過小評価する部分や、破局論的展望へ傾倒する部分等もある。レーニンの帝国主義分析の目的は文明全体、歴史時期全体が破局に臨迫していることであった。すなわち、資本主義はそれ以上改良されることもなく、最終的窮地に到達しているという認識である。しかし、資本主義の実際傾向は生産力の停滞ではなく、持続的発展であった。

しかし、ウォレンとデサイがこのような欠陥を理由にしてレーニンの『帝国主義論』をマルクスの『資本論』からの後退だと主張するのは誤りである。ウォレンは次のように主張した。「独占資本主義が競争資本主義に比べて寄生的であり、腐敗して、停滞しているという『帝国主義論』の論旨はレーニンが帝国主義と植民地および半植民地の間の関連を搾取と生産力拡大の典型的結合である資本主義発展の両面的な動態的過程ではなく、単純な掠奪の関係と把握している印象を与えた」(Warren, 1980: 82)。そうして「レーニンの『帝国主義論』は、帝国主義の進歩性に関するマルクス主義の教義を覆して……マルクス主義から資本主義が前資本主義社会においても社会経済的進歩の道具となりうるという観点を余すところなく追い出した」(Warren, 1980: 47)。レーニン以後「帝国主義は第3世界工業化についての重要な障害物と見なされ始めた。資本主義はそのどこにおいても肯定的な社会的機能を発揮することはないと宣言された。このような結論はレーニンの『帝国主義論』に暗々裏に含蓄されていて、1928年のコミンテルン以後明白に表現された」(Warren, 1980: 83)。ソ連・東欧ブロックの崩壊の衝撃を受け、スターリン主義経済学者から資本主義擁護者に転落したデサイも、20年前のウォレンの主張を反復して、次のように主張している。「『帝国主義論』は力強い文体で書かれているが、マルクスの経済学的厳密性を落としている。事実、レーニンがナロードニキと繰り広げた論争が『帝国主義論』よりはるかに厳密であるといえる。……戦争以前のナロードニキとの論争で、さらに革命以後の実際的政策立案者としてのレーニンがとった資本主義に対する非常に肯定的な態度は、『帝国主義論』で現われている資本主義に対するレーニンの非常に否定的で暗い見解と対照される。」(Desai, 2003: 234, 237)

しかし、マルクスが帝国主義の進歩性を主張したというウォレンとデサイの主張はマルクス思想を歪曲するものである。なぜかというと、マルクスは一方では帝国主義の進歩性を語りつつも、他の方では帝国主義を「流血的過程」と規定しているからである。重要なことは、晩年のマルクスの帝国主義に対する見解が後者の側へ傾いていたという事実である。例えば、マルクスは1881年ダニエルソン(Nikolai Danielson)に送った手紙で次のように書いた。「英国が、毎年インドから、地代、インド人たちには不要な鉄道に対する配当金、軍人官吏たちに対する手当等の形態で収奪していくものは……インドの農業および工業労働者の6千万名の所得総合よりもさらに多い！これは徹底して流血的な過程である」(Marx, 1881a: 63. 強調はマルクス)。マルクスは、同じ年に「ペーラ・ザサーリチに宛てた手紙第3草稿」でも次のように書いた。「東インドを例として挙げれば……そこでは土地の共同所有の廃棄が原住民を前進させるのではなく、後退させる英国の文明破壊行為(vandalism)以外に何でもないという事実を知らねばならない」(Marx, 1881b: 365)。晩年のマルクスは西欧の近代が他の地域に及ぼす影響を「近代化」としてではなく、「文明破壊」だと把握した。マルクスは初期には周辺に対する帝国主義の影響を進歩的だと考える部分もあったけれど、晩年には反動的だと考えを変えたのである。それならば、帝国主義の反動性を豊富に理論化したレーニンの『帝国主義論』

は、ウォレンやデサイの主張のようにマルクスの思想を覆すものであるどころか、晩年のマルクスの思想を継承発展させたものだと評価されねばならない。

7. 後期レーニン：経済主義への後退

戦時共産主義と新経済政策の時期のレーニン、すなわち後期レーニンの思想は病床での「最後の闘争」の時期の最後の炎を除外すれば、一般的に1917年革命の直後噴出した革命的「狂気」が退潮する様相に示されている。その徴候はレーニンが戦時共産主義の時期の状況で強制されたソヴェト民主主義の原則の後退を内戦後にも継続維持したことに、また新経済政策の導入にとまなう市場経済の拡大を理論的に正当化したことに示される。

1917年の『国家と革命』では、すべてが透明だった。大衆はつねに国家権力に接近できなければならない、国家権力は人民によって行使されなければならない。『国家と革命』では手続き的規則が社会主義行政の核心として強調されていた。『国家と革命』では社会主義体制における代表者たちは直接選出されなければならないだけでなく、いつでも召喚されなければならない、労働者の賃金水準の給料だけを受け取らねばならなかった³⁴⁾。ところが、1917年10月以後、戦時共産主義の時期から、このような『国家と革命』の直接民主主義の諸原則が急速に退潮し始めた。反面、しばらく抑制されていた第2インターナショナル・マルクス主義の機械論的唯物論、経済決定論の諸要素がよみがえった³⁵⁾。レーニンは10月革命直後から労働者と農民による会計と統制に関心を集中した。『国家と革命』において闡明した国家機構の破壊と国家消滅ではなく、経済に対する国家統制としての社会主義、資源を企業と個人に配分する機構としての国家の概念が、レーニンの執権初期からロシアの現実を支配し始めた。10月革命成功後それほどたたずに、レーニンはソヴェト政府を「プロレタリアート独裁」と称し始めた。1918年4月に書かれたパンフレット「ソヴェト政府の当面の課題」で、レーニンは「ソヴェト権力はプロレタリアート独裁の組織された形態に他ならない」(Lenin, 1918: 142)と定義したが、これは『国家と革命』では探し出すことができない表現である。1920-1921年から、レーニンは「コミューン国家」や「ソヴェト民主主義」についてより以上語らず、プロレタリアート独裁を主張し始めた。レーニンは「いまからは少ない政治が最上の政治だ」(Lenin, 1920b: 514)とも主張した。そうしながら、「政治が後方へ退き、政治が少なめに、しばしばまたより短く論議されて、エンジニアと農学者たちが主な討論者として登場する幸福な時代」(Lenin, 1920b: 513-514)を希求した。1921年の第10回党大会でレーニンは「反対の時期は終わった。いま反対に轡をはめなければならない。われわれは反対をより以上願わない！」(Lenin, 1921a: 200)と宣言した。

レーニンは、革命前の1913-1914年頃から、テイラー主義に関心を持っていたが、1917年革命後、レーニンは、これを当時のロシアの生産過程に積極的に導入しようとした³⁶⁾。レーニンは個人経営、規律、位階的統制と権力を支持した。1920年、内戦が終わった後、レーニンはロシアの青年共産主義同盟で演説して、共産主義社会の基礎が「電化」だと主張した³⁷⁾。

レーニンは10回党大会で新経済政策への転換を宣言した。レーニンは当時の社会主義ロシアの国家権力が堅固な階級的基盤を欠如しているのを認定して、経済政策の転換の必要性を語った。1921年か

ら、レーニンが党の主要課題は政治的なことではなく、経済的で行政的なことであると見なした。党の主要課題は労働者階級の自己解放ではなく、消滅した労働者階級を再創出することに再設定された³⁸⁾。レーニンは1921年5月の第10回党協議会でこのような新経済政策が「真摯に長期間にわたって」実施するよう強調した (Lenin, 1921b: 436)。いまレーニンは、社会主義が市場関係を除去することによってではなく、市場関係を通じてのみ到達することができるように考えたようになった。このようなレーニンの新経済政策は、後日の市場社会主義論に体系化される。レーニンはその新経済政策を体系的に提示した「現物税 (食糧税)」(1921) で、当時のロシアで市場関係の発展が官僚主義の病弊についての処方になることができ (これは今日の新自由主義 (!) と共鳴する主張である)、また国家資本主義的生産関係が非常に進歩的な生産関係だと主張した³⁹⁾。すなわち、レーニンの新経済政策論には、『帝国主義論』の時期には抑制されていた『発展』の問題設定、すなわち第2インターナショナルの経済決定論と資本主義の進歩性論が再現されている。しかし、このような新経済政策の時期のレーニンの社会主義概念がマルクスの社会主義概念と符合しないという事実、また1917年当時のレーニンが『国家と革命』で定式化した社会主義の概念とも真っ向から背馳しているという事実は、とやかく言う必要がないことである。

8. 結 論

マルクスの経済学批判体系の発展において、レーニンが成し遂げた寄与と限界は相当部分第2インターナショナル・マルクス主義との関係の側から把握することができる。レーニンは第2インターナショナル・マルクスとの断絶を通してのみ、マルクスの経済学批判体系の発展に本当に寄与ことができ、まさにこの地点において、レーニンの固有の成就が発見できる。これと同じくマルクスの経済学批判体系の理解と適用で、レーニンの誤謬は、第2インターナショナル・マルクス主義との断絶の不徹底性、レーニンにおける完全に清算されない第2インターナショナル・マルクス主義の残滓に縁由している。第2インターナショナル・マルクス主義との断絶以前の代表的著作である『発展』で、レーニンは資本主義の発展に民主主義が調応するという経済決定論と資本主義の進歩性論の問題設定により、ロシアの社会構造を把握しようとしたが、第2インターナショナル・マルクスとの断絶以後の代表的著作である『帝国主義論』で、レーニンは不完全ではあるが、このような第2インターナショナル・マルクス主義の問題設定を克服した。全般的にレーニンの経済思想は、『帝国主義論』を除外すれば、マルクスの経済学批判体系を進展させた部分は大きくない。むしろ、初期レーニンの経済思想を支配したのは、第2インターナショナル・マルクス主義の問題設定であり、『帝国主義論』をはじめとする成熟したレーニンの思想にも第2インターナショナル・マルクス主義の残滓は依然として残っていて、晩年には新経済政策の市場社会主義論的正当化に見るように、かえって強化される傾向さえ見られた。

ところで、わが国の進歩陣営は、しばらくレーニンの経済思想から第2インターナショナル・マルクス主義との断絶の試図という「合理的核心」を受容発展させるよりは、レーニンを偶像化するのしなければ、正反対に全面棄却するとか、あるいはレーニン自身が克服しようとした第2インターナ

シヨナル・マルクス主義的諸要素をレーニンの経済思想の核心として誤解してきた。わが国の進歩陣営でレーニンの『発展』と「二つの道」の理論が無批判的に受容されて、『帝国主義論』が独占資本主義の段階論と同一視されたのは、これをよく示している。そのうち、特に『発展』と「二つの道」の理論を絶対化した弊害は深刻だった。レーニンの農民層分解論と「二つの道」の論理は日本の講座派マルクス主義の歴史学者大塚久雄の資本主義成立史論を經由して、わが国の進歩陣営、特にマルクス主義経済史学に多くの影響を及ぼした。大塚はレーニンの『発展』における市場理論と農民層分解論、「二つの道」論をマルクスの『資本論』第3巻での資本主義理解の二つの道の理論と結合させて、「小生産者型の道＝革命的道＝正常的資本主義発展」、「地主商人型の道＝保守的道＝跛行的資本主義発展」と図式化した。1960－1970年代当時、大塚のような日本講座派のスターリン主義経済史理論に依拠して、韓国資本主義の跛行性を批判する買弁的官僚資本主義論、民族経済論が流行した。しかし、このとき大塚の移行論が基礎としていたレーニンの農民層分解論が一国資本主義論であり、小生産者型の道、すなわち原始的蓄積の経済的過程（価値法則の貫徹による小生産者層の両極分解）に依拠した資本主義の発生を、資本主義発展の「古典的」理念型として絶対視して、歴史的資本主義発生過程の暴力的性格、原始的蓄積の経済外的過程を副次化したという事実は忘却された。レーニンの「二つの道」の論理は、また1980年代の韓国社会性格論争では、民族資本を中心とする資本主義発展の道（小生産者型資本主義発展のコース、「アメリカ型」のコース）、スターリンの2段階革命論に対する歴史理論的正当化につながり、「古典的」資本主義の発展コースを美化して、中進資本主義論への投降を主張した。レーニンの「二つの道」の論理は1990年代のソ連・東欧ブロックの崩壊以後には、「資本主義以外の対案不在論」との調合を果たし、「ライン資本主義の」（「よい資本主義」）を「アングロ・アメリカ資本主義」（「悪い資本主義」）に対立させ、支持する一部の進歩陣営に左派的外皮を被せる役割を果たしている。

以上の論議は、今日古典マルクス主義の伝統に立つということが、レーニンの思想を全体的に無批判的に受容することにはならないことを示した。特に初期レーニンの経済思想は、第2インターナショナル・マルクス主義の機械的適用であって、古典マルクス主義の伝統と対立している。しかし、青年の時期のレーニンの経済思想の限界を理由に、レーニンのマルクス主義全体を棄却することは困難である。レーニンのマルクス主義の精髓は、経済理論よりは第2インターナショナル・マルクス主義と断絶を通して成し遂げられた「戦争と革命の時代」の情勢分析、すなわち『帝国主義論』、「4月テーゼ」、『国家と革命』とその革命的実践にあるからである。

【原 注】

- 1) キム・セギョン (김세균) は、わが国のマルクス主義者としては珍しく、レーニンの哲学における不均等性と不連続性に注目した。「今までの論争では、おおよそレーニンの理論を、固定的である、不変であると見る観点が支配的であって、レーニンの理論がどのような過程を経て、変化・発展したのか、きちんと補足していなかった。……彼ら（アルチュセールとラクラウ）のレーニン解釈にも同じ種類の欠陥が現われていたが、このことは、少なくとも、『発展』を書いて以後、さらにこの著述を書くために『資本論』の方法論を徹底的に研究して以後、すでにレーニンが唯物弁証法に対する自分なりの完成した構想を持っていたということ、さらに『唯物論と経験批判論』における立場と『哲学

- ノート』における立場を同一のことだと見ることによって、レーニンの哲学（唯物弁証法）構想の発展およびそのような発展をもたらした条件を捕捉することができないということである。」（김세균, 1992: 116）
- 2) エドワード・ノーヴは次のように主張した。「経済理論家としては、レーニンが1899年（『発展』が出版された一筆者）以後、寄与したものはほとんどない。帝国主義について彼の本は特に独創的だということではできない。」（Nove, 1979: 80）
 - 3) 1914-1915年の間に執筆された『哲学ノート』は、その分水嶺である。レーニンにおける『唯物論と経験批判論』と『哲学ノート』の間の認識論的断絶に関する詳細な論議は、Löwy (1990), Anderson (1995) を参照することができる。しかし、このように断絶を強調するといつて、これがレーニンの初期思想の前提を棄却するとか、革命政党的建设という実践的問題意識を中心とするレーニンの思想の本質的連続性を否定するものではない。これについての論議、Rees (1998) を参照することができる。
 - 4) ジジェクは次のように述べている。「われわれが固守しなければならないのは、このようなレーニン主義的ユートピアの（厳密にキルケゴールの意味での）狂気である。これに比べて、スターリン主義は現実主義的「常識」への復帰を代弁している。……レーニンの著作におけるこのような偉大性が何よりも分明に現われた時期は、初めて革命がツァーリ体制を打倒して、民主主義体制を樹立した1917年2月革命から10月の2度目の革命に至る時期である。」（Žižek, 2002: 5-6. 強調はジジェク）
 - 5) 筆者は、本稿を書く過程で、レーニンの経済思想についての客観的評価を試みた太田仁樹 (1989), Howard and King (1989), Zarembka (2000, 2003) を主に参考にした。しかし、太田仁樹 (1989) は、『発展』と『帝国主義論』の間の断絶を認定しつつも、このような断絶が第2インターナショナル・マルクス主義との断絶を背景にしている事実を明白にしていけない点で、また、Howard and King (1989) は、リカード主義的偏向を有する点で、さらに、Zarembka (2000, 2003) は、マルクス主義の経済学についてのレーニンの寄与をまったく認定していない点で、筆者の問題意識との差異がある。
 - 6) アルチュセールは、初期マルクスと中期マルクスとの差異の「認識論的断絶」を主張しつつも、レーニンに対しては、そのような「認識論的断絶」の存在を否定して、『発展』のようなレーニンの初期の著作を非常に高く評価している。「レーニンの『発展』。世界で唯一の科学的社会学の著作であり、社会学者だというなら誰でも注意深く研究しなければならない著作。……この本は、レーニンの1894年と1899年の間の、非常に明瞭で厳密なテキストであり、また人民主義者の「ロマン主義的」経済学者たちに対する彼の批判であり、マルクスの『資本論』第2巻の基本命題についての数多い研究の核心を要約したものである。……フランスの「農業問題」「専門家たち」は、この非常に現実的なテキストを厳密に読み、これから公式統計をどのように「取り扱う」べきかを、学ぶ必要がある。」（Althusser, 1992: 112-113）。代表的レーニン研究者であるハーディング (N. Harding) も、『発展』を非常に高く評価している。「『発展』はマルクス主義の文献における封建制から資本主義の発展という経済的時期に関する最も完全で、実証的で、論理的な検討である。」（Harding, 1977: 107）
 - 7) これに関連して、上島武 (1985) は、トロツキーのロシア資本主義論がロシア資本主義の特殊性を積極的に解明しているという点で、レーニンのロシア資本主義分析より優秀だと評価している。Howard & King (1989: 225-228) も見よ。トロツキーの政治経済学体系についての筆者の論議としてはチョン・ソンジン (1993) を参照できる。
 - 8) 切取地とは、1861年の農民解放当時農民がその時まで利用してきた農民分与地を地主が削減、切り取って、自己の所有地とした土地を意味する。
 - 9) 「われわれの農業綱領の全体的な核心は、農村プロレタリアートが農奴制の残滓を除去するために、すなわち切取地を除去するために、富農とともに闘争しなければならないという点である。……プロレタリアートは、農奴制を一掃すること以上には、切取地返還以上には、富農と一緒に進むことができず、また進んでもいけない。」（Lenin, 1903: 385）
 - 10) レーニンは、トゥガン・バラノフスキーを批判しつつ、次のように主張した。「『社会の消費力』と『多様な生産諸部門の比例関係』—これらは互いに孤立した、独立的な、連関することのない諸条件ではない。反対に消費の一定の水準自体が比例性の一要素である。」（Lenin, 1899b: 58-59）
 - 11) ロスドルスキーは、レーニンが『発展』を執筆した当時、マルクスの『剰余価値学説史』と『政治経済学批判要綱』が出版されていなくて、これに接することができず、その結果『資本論』第2巻、第3巻の重要性を不当に誇張することになったと主張している（Rosdolsky, 2003: 246）。「青年レーニンが実現問題に関する論文を書いたとき、かれはマルクスの『剰余価値学説史』や『政治経済学批判要綱』についてまったく知ることが出来なかった。それゆえに彼はマルクスの経済学著作の構造が持つ方法論的複合性について、わずかに不十分な直感程度しか持てなかった。……レーニンはむしろ『資本論』第2巻、第3巻の分析が持つ理論的妥当性と意義を誇張した。……再生産表式と『資本論』第2

- 巻の分析は、それ自体としては実現問題についての「完全な説明」を提供することができず、マルクスの恐慌および崩壊理論との関連性のなかでのみ、この問題に対する解答を提示することができるのである。結局、われわれが見るのに、レーニンの実現理論の最も大きな欠陥はまさしく、この基本的な事実を看過していることである。
- 12) レーニンは、「ふたたび実現問題に関して」において次のように述べた。「ロシアの農民は自分たち内部での分解によって、われわれの資本主義のための市場を創出するという、ストルーヴェの主張は完全に正しい。」(Lenin, 1899c: 90)
- 13) このようなレーニンの『資本論』理解の問題点をかつかつて認識したのはグロスマン (H. Grossmann) である。グロスマンは、これを迂回的に次のように表現している。「レーニンは正しくも高度に発達した資本主義は内在的な「停滞と腐敗」の傾向と特徴づけられると述べた。しかし、レーニンはこの傾向を独占の成長と連関させた。そのような連関が存在するという事実は論難の余地がない。しかし、ただそのようにいうことでは不十分である。……独占の成長は価格を引き上げることで収益性を高める手段である。それから、このような意味でそれは表面的現象にすぎず、その内的構造は資本主義蓄積と連関した不十分な価値増殖である (Grossmann, 1929: 122)。
- 14) レーニンは、1897年シスモンディを批判しつつ、次のように述べた。「蓄積はなるほど収入 (スミス) を超えた生産の超過分である。生産を拡大するためには (用語の範疇の意味で「蓄積」するためには)、他の何よりも生産手段を生産することが必要である。」(Lenin, 1897: 155) レーニンはそれから18年が経過した1914年にも『グラナート (Granat) 百科事典』の「マルクス」の項目を執筆するのに、次のように書いた。「新しい、また最高に重要なことは、マルクスの資本蓄積分析である。すなわち剰余価値の一部の資本への転換、それからそれを資本家の個人的必要や気まぐれを満足させるためではない新しい生産のために使用すること。」(Lenin, 1914b: 63)
- 15) マルクスは、むしろ過剰生産恐慌を否定したりカードゥを批判しつつ、過剰生産恐慌を認定したシスモンディを肯定的に評価しさえした。マルクスは『剰余価値学説史』で次のように述べた。「シスモンディは、資本主義的生産の矛盾を深く認識していた。……彼は特に根本的の矛盾を知っていた。すなわち一方で商品から構成されていて、同時に貨幣に転化されねばならない生産力と富の無制限の発展、他の一方で生産者大衆が生活必需品に限定されているという事実に体制が基礎を置いていることの間の矛盾。そのようにして、シスモンディに従えば、恐慌はリカードゥが主張するように偶然的なものでなく、内在的な矛盾の必然的な爆発—これは徐々により大きな規模でまた定期的に勃発する—である。」(Marx, 1971: 55-56)
- 16) 論理歴史主義はマルクス主義の価値法則をバビロン時代から存在した商品交換を支配する法則に還元して、これが資本主義になれば生産価格法則への歴史的転換が成し遂げられると見る立場であるが、これは価値法則と剰余価値法則の作用範囲をそれぞれ単純商品生産と資本主義に分離することによって、『資本論』第1巻と第3巻の間の「矛盾」(価値論と生産価格論の差異の矛盾、いわゆる「転形問題」)に対する攻撃を防御しようとする目的でヒルファーディングがつくり出したものである。しかし、論理歴史主義はマルクスの理論を擁護しようとする意図にもかかわらず、マルクス理論の核心である価値法則が資本主義社会で貫徹されるという事実を否定する結果を将来した。すなわち論理歴史主義は価値法則が通用する時代を資本主義ではない単純商品生産段階に限定して、競争資本主義の段階は生産価格論および剰余価値法則、独占資本主義の段階では独占価格論および最大限利潤の法則あるいは独占利潤の法則が支配することになるというスターリン主義経済学体系の基本的問題設定になる。価値法則は資本主義に固有の法則ではないので、商品と貨幣が存在する社会主義でも作用するというスターリン主義経済学の主張、論理歴史主義の理論的・政治的含蓄は頂点に到達する。マルクスの冒頭商品と価値法則についての論理歴史主義的解釈は、スターリン主義体制における商品生産と価値法則の存在を正当化して、糊塗することに奉仕した。マルクスの方法論に対する筆者の論議としてはチョン・ソンジン (1997; 2002) 参照。
- 17) レーニンは『哲学ノート』で次のように書いている。「ヘーゲルの『論理学』全体を徹底して研究して、理解することなしにはマルクスの『資本論』、特に第1章を完全に理解することは不可能である。それゆえに半世紀が流れたが、マルクス主義者の誰もマルクスを理解することはできなかった!!」(Lenin, 1915c: 131-132. 強調はレーニン) 上の引用文は、ヘーゲルの『論理学』全体を徹底して研究して理解することができない状態で書いた『発展』の『資本論』理解が、欠陥のあるものだというのを、レーニン自ら自己批判していると読み取らねばならない。すなわち、上の引用文の「その誰も」には、レーニンは包含されないというアルチュセールの偶像崇拜的強引主張 (Althusser, 1992: 118-119) とは違って、当然レーニン自身も包含されている。けれども、すでにレーニンはヘーゲルの『論理学』全体を徹底して研究して理解していたので、『資本論』第1巻の価値形態論と物神性論を完全に理解することができるようになった。本質と現象形態の区別だけでなく、その連関を強調しながら現象形態を重要でない非本質的なものと見なしてはいけないというようなレーニンの言及は、マルクスの価値形態論と物神性論の意義を認識するほどに接近していたことを示している。「非本質的な、外観性の、皮相的なものたち、さらにしばしば消滅して、さほど「確実

- に「保存されないで、「本質」のように「さほど確固として定着」していない、[例えば] 河川の運動—表面の水泡とその深い流れ。しかし、水泡でさえ本質の一表現なのだ！」(Lenin, 1915c: 74. 強調はレーニン)
- 18) 「二つの道」の理論の要点は、レーニンが1907年に書いた『発展』第2巻「序文」に叙述されている。「ロシア革命が当面する基礎の上で、客観的にはこの革命の発展と結末の二つの基本線がありうる。一つは数千本の糸で農奴制度と結びついていた地主経営が存続しつつ、徐々に純資本主義的な「ユンカー的」経営へ転化していく線である。国家の農業構造全体は資本主義的なものになるけれども、農奴制の特徴を長期間保存する。もう一つは革命が古い地主経営を粉砕して、農奴制のすべての遺物を、なによりも代替地所有を廃棄する線である。雇役から資本主義への究極的移行の基礎となるのは、農民のために地主の土地が収奪されると、巨大な刺激を受ける小農経営の自由な発展である。農業構造全体が資本主義的になる。なぜならば農奴制度の痕跡がより完全に破壊されればされるほど、農民層の分解が次第に急速に進行するためである。」(Lenini, 1899a: 19-20)
- 19) これは、今日一部の進歩陣営が「アングロアメリカ資本主義」の対案を「プロイセン型」の現在型である「ライン資本主義」に求めるのとは対照的である。
- 20) レーニンの「二つの道」の理論を高く評価するハワードとキングも次のように指摘している。「ストルイビン（「プロイセン型」一筆者）と、レーニン（「アメリカ型」一筆者）を競争者と見なすことも一理あるけれども、両者の間には利害関係が合致している部分もあった。レーニンは自身の目的を達成するために、ストルイビンが自身の目的を相当に達成するのを要請した。そのようにして村落共同体が徹底して破壊されて、農民ブルジョアジーがより確固としたものとなるためである。したがって、レーニンのマルクス主義はプロイセン型の道の部分的成功を要請していた。」(Howard and King, 1989: 215)
- 21) レーニンにおいて、ツァーリ体制と地主制が結合して発展する資本主義を「プロイセン型」の道として後発資本主義国の発展の独自の類型を把握したという解釈もあるが、そのような解釈は正しくない。レーニンにあっては、「プロイセン型」の資本主義も西欧のそれと同様「純粋な資本主義」だった。万一「プロイセン型」の資本主義がロシアに確立されたなら、レーニンにとっては、ブルジョア的課題としての農民問題は消滅するのである。農民問題をブルジョア的課題、農民運動をブルジョア民主主義運動と見なすレーニンにとって、「プロイセン型」の資本主義の確立を認定することは、広範囲なロシアの農民運動を政治的に牽引することのできる理論的根拠を喪失することを意味した。まさしくこのために、レーニンは、「二つの道」の理論を提起して何年もたたないで、これを放棄した（太田仁樹, 1989: 212）。
- 22) 「資本主義社会における土地国有化の問題は本質的に区別される二つの部分に分かれる。差額地代の問題と絶対地代の問題。国有化は前者の所有者を変更して、後者の存在自体を瓦解させる。したがって国有化は、一方で資本主義の限界内部での部分的改革（剰余価値の一部の所有者の変更）、別の一方で資本主義全体の発展を妨害する独占を廃棄する。……資本主義の自由な広範な、そして急速な発展、階級闘争のための完全な自由……これが資本主義生産体制における土地国有化の意味することである。」(Lenin, 1907: 209-300, 316) 「国有化は地代を国家に移転させることを意味する。……国有化は土地の利用を促進することである。……土地国有化はブルジョア的措置である。……土地国有化はブルジョア社会でも可能であって、考えることができる。土地国有化は資本主義の発展を遅滞させることではなく、促進することであり、農業関係領域における最大のブルジョアの改革である。」(Lenin, 1906: 181, 183)
- 23) 「プロレタリアートは権力獲得のために、共和制のために、土地没収のために、すなわち農民を獲得するために、農民の革命的力を完全に利用するために、軍事的・封建的「帝国主義」（ツァーリ体制）からブルジョアのロシアを解放することに「非プロレタリアート人民大衆」を参加させるために、現在闘争していて、今後とも献身的に闘争するだろう。」(Lenin, 1915b: 420. 強調はレーニン)
- 24) レーニンは1917年7月「立憲的幻想」で次のように語った。「ロシアのブルジョアジーが地主と緊密に融合しているということは分明である。……巨大な経済革命なしには、銀行を全人民の統制の下に置くことなしには、シンジケートを国有化することなしには、資本に対する最も無慈悲な革命的措置をとることなしには、ロシアで土地の私有を廃止して、さらに無償で廃止することは不可能である。」(Lenin, 1917a: 197-197. 強調はレーニン)
- 25) ハワードとキングは、筆者とは正反対に、「1905年から1914年の間のレーニンの理論化がロシア・マルクス主義における真正な進展」だと高く評価する。「この時期にレーニンは革命問題と密接に関連した政治経済学を提出したが、その質は今までのロシア社会民主党で見ることができない水準だった。……レーニンは資本主義の相異なる諸類型を区分する新しい観点を提示して、資本主義発展の諸形態をブルジョア民主主義革命の多様な諸変種と関連させせることで、ロシア革命に対する「抽象的」概念しか持っていなかったプレハーノフを正しく批判した。(Howard and King, 1989: 211) さらにハワードとキングは、レーニンの経済思想における「認識論的断絶」が1914年の第2インターナショナル崩壊以後ではなく、その前の1905年革命以後に生じた点でも、本稿の立場と異なっている。それらは次のように

- 主張している。「1905年以後、ボリシェヴィズムは、資本主義発展とブルジョア革命の複合的構造についての（レーニンの）唯物論的分析に基礎をおくことができるようになった。」(Howard and King, 1989: 206)
- 26) 「1895年エンゲルスの死亡以後、彼に代わるレーニンの英雄はドイツ社会民主党の理論家のカウツキーだった。」(Service, 2001: 233) 例えば、レーニンは、Lenin (1899e) に見るようにカウツキーの『農業問題』(1899)を絶賛した。
- 27) 詳細な論議はLöwy (1990: 第2章)を参照せよ。しかしながら、レーニンが1917年『4月テーゼ』をきっかけにして、レーニンがトロツキーの永続革命論を受け入れたのかについては、論争が継続している。例えば、White (2001)は『4月テーゼ』の核心はロシアにおける社会主義革命の可能性を認定することにあるよりも、ソヴィエトを唯一の可能な革命政府の形態として認定することにあるという主張である。さらにレーニンが、トロツキーが主張したように、一貫した世界革命論者だったのかは不確実である。しかしながら、ロシア資本主義の不均等結合発展に対する認識により永久革命論を導出したトロツキーとは違って、レーニンはそれを先進資本主義に対する分析、すなわち国家独占資本主義論により導出した。
- 28) 1917年の「4月テーゼ」の発表は、レーニン主義が一つのイデオロギーとして公開的に出現した決定的瞬間だった。(Harding, 1996: 82)「1917年の4月から10月までの時期は明らかにレーニン主義の発展において決定的に重要な時期である」(Harding, 1996: 106)。事実1916年末から1917年初の時期のように、レーニンがマルクス・エンゲルスの国家論に熱中した時期はなかったであろう。この時期に、レーニンは特にマルクスとエンゲルスの国家論を深く研究した。『帝国主義論』と『国家と革命』はその産物である。要するに、「一つの区別されたイデオロギーとして、また現代世界についての精神的指導としてのレーニン主義の区分的特徴が1917年4月以前に定式化されて、またよく知られていたと主張するのは、あらゆる証拠と明白に矛盾している。レーニン主義が姿を整え多少一貫した多少包括的な現代世界イデオロギーとして出現したのは、1917年以後である。」(Harding, 1996: 268)
- 29) しかし、レーニンの弱い環論をブハーリンとスターリンの弱い環論と同一視してはならない。これはブハーリンが『過渡期経済論』で「世界資本主義体制の崩壊は最も脆弱な国家資本主義の組織で始まらざるをえない」と主張したのに対して、レーニンが「間違っている。それは中間程度に脆弱なところで始まる。一定の水準への資本主義の発展なしには、何も、ここロシアで起こりえない」(Lenin, 1920c: 72)と論評したことで確認される。帝国主義の環が最も脆弱なところで断たれるという主張はブハーリンの考えであり、これに対して、レーニンは同意しなかった。
- 30) 例えば、クリフは次のように主張している。「現代資本主義についての実際の描写という側面で、レーニンはまったく独創的ではなく、実際にすべてをブハーリンから借用している。」(Cliff, 1949: 61)
- 31) レーニンが使用したヒルファーディングの『金融資本論』は合法マルクス主義者トゥガン・バラノフスキの不比例恐慌論をそのままもなっていたという事実も指摘しておこう。
- 32) 元来、マルクスの政治経済学批判での独占概念は、主として資本家階級の生産手段所有の独占あるいは経済の一形態を指称するものとして使用された。マルクス主義文献での独占を産業資本と金融資本が融合した資本分派として定義するのはヒルファーディングの『金融資本論』が最初であり、これはレーニンの帝国主義論で使用されて、また新古典派経済学の市場組織論の独占力概念と結合してスターリン主義国家独占資本主義論に継承された。
- 33) したがって、クリフが「改良主義の経済的基礎」は永久軍備経済が結果させた「資本主義的好況」であり、「改良主義が堅固に労働者階級の全体に拡散していて、すべての少数革命勢力を挫折・孤立させている事実は、改良主義の経済的・社会的基礎がレーニンが主張したような「プロレタリアと労働者大衆のうちの極少数」にあるのではないことを確然と示している」(Cliff, 1982: 109-110)と、レーニンの労働貴族論を批判しているのは正当である。
- 34) したがって、レーニンが手続き的民主主義を蹂躪して、合法性の概念が欠如していたという批判は事実と違う。レーニンは自身の見解をつねに中央委員会、党大会の多数決議を通して観察しようとした。レーニンの生存時の党大会は毎年開催された。手続き的民主主義の原理を蹂躪したのはスターリンである。スターリンは1927年15回党大会で権力を掌握した後、1952年死亡するまでの25年間党大会をたった3回だけ開催した。農業集産化、工業化のような重要な諸政策が党大会に上程さえもされなかった。
- 35) 筆者と正反対の立場だが、デサイも、革命後のレーニンの新経済政策は『帝国主義論』で棄却された『発展』の資本主義の進歩性論がまた復元されたといいつながら、次のように主張している。「10月革命後、ロシア経済を運用する問題に直面することになるやいなや、レーニンは少なくとも国内経済に関する一つの観点を放棄したとすることができる。『帝国主義論』はコミンテルンの先進資本主義国革命戦略の基本テキストになったが、レーニンは同時に国内経済政策の決定では自身の初期の(『発展』での一筆者)資本主義発展に関する観点を採択した」(Desai, 1989: 20)。「ブレスト・リトフスク条約以後、革命初期に溢れていた熱情が収まるやいなや、レーニンは国家資本主義の長所を激賞して進み出た。この体制は社会主義ではないが、私的資本主義よりは優れたものだった。目標はロシアで蓄積を加速化するこ

- とであり, そうであれば, きちんとした会計と位階制的経営, それから労働者の規律が必要だった。労働組合は蓄積の必要に従属しなければならないという古典マルクス主義の視角に戻っている」(Desai, 2003: 234. 強調は筆者)。まさに上のデサイからの引用文はゴシックで強調された単語, すなわち「古典マルクス主義」を「第2インターナショナル・マルクス主義」または「[発展]」に矯正すれば, 正しい叙述である。
- 36) レーニンは「ソヴェト政府の当面の課題」(1918.4)で, 次のように主張した。「われわれは成果給の問題を提起して, それを実際に適用して, 検証しなければならない。われわれはテラー・システムにおける科学的で進歩的なものうち, 多くの部分を適用するという問題を提起しなければならない。われわれは賃金が生産総量と比例するようにしなければならない。」(Lenin, 1918: 133-134)
- 37) 「全国土と工業と農業の全部門を電化したあとには……われわれは自然の力で共産主義社会を建設できるのだ。」(Lenin, 1920: 289)
- 38) 「ロシアにおける工業プロレタリアートは戦闘と激甚の窮乏のために, 脱階級化した。すなわち自身の階級基盤を喪失して, プロレタリアートとして存在しなくなった。……プロレタリアートは消滅した。」(Lenin, 1921d: 114-115)
- 39) 「対案(こうしてこれは唯一にして, 賢明で最後に可能な政策である)は, 資本主義の発展を禁止したり, 遮ろうとするものではなく, それを国家資本主義に向かうようにすることである。……わが国の官僚主義的慣行は別の経済的根柢を持っている。それは貧困, 文盲, 文化の欠如, また農業と工業の間の交換の不在, 両者間の連関および相互作用の不在等による小生産者たちの原子化され分散化された状態である。……交換という取引の自由を語っている。それは資本主義である。われわれが小生産者の分散性を克服して, さらにある程度までは官僚主義の害悪と戦うことを助ける程度に従って, それはわれわれに有用である。」(Lenin, 1921c: 73, 100-101. 強調はレーニン)

【参 考 資 料】

- (原論文に附されたものを掲げる。ハングル表記の人名にはカタカナ表記を附し, ハングル表記の論題名・雑誌名・書名には日本語訳を附す。欧文資料には日本語訳を附さない。)
- 김세균 (キム・セギョン). 1993, 「레닌의 철학적 실천과 유물변증법 구상 (レーニンの哲学的実践と唯物弁証法構想)」, 『이론 (理論)』, 제4호.
- 정성진 (チョン・ソンジン). 1993, 「트로츠키의 정치경제학 체계 (トロッキーの政治経済学体系)」, 『이론 (理論)』, 제7호.
- 정성진 (チョン・ソンジン). 1997, 「정치경제학과 사회과학 패러다임: 마르크스의 방법을 중심으로 (政治経済学と社会科学パラダイム: マルクスの方法を中心に)」, 『세계정치경제 (世界政治経済)』, 제4호.
- 정성진 (チョン・ソンジン). 2002, 「제2인터내셔널의 마르크스주의 (第2インターナショナルのマルクス主義)」, 김수행·신정완 편 (キム・ソヘン・シン・ジョンワン編), 『현대 마르크스주의 경제학 (現代マルクス主義経済学)』, 서울대학교출판부 (ソウル大学校出版部).
- 上島武. 1985, 「トロッキー의 러시아資本主義論」, 『大阪經大論集』, 3月.
- 太田仁樹. 1989, 『レーニンの經濟學』, 御茶の水書房.
- Althusser, L. 1992, 『레닌과 철학 (レーニンと哲学)』, 이진수 옮김 (イ・チンス訳), 백의.
- Anderson, K. 1995, *Lenin, Hegel, and Western Marxism: A Critical Study*, University of Illinois Press.
- Cliff, T. 1979, *Lenin*, Vol.2, Pluto Press.
- Cliff, T. 1982, *Neither Washington Nor Moscow*, Bookmarks.
- Desai, M. 2003, 『마르크스의 복수 (マルクスの復讐)』, 김종원 옮김 (キム・チョンウォン訳), 아침이슬.
- Desai, M.(ed.) 1989, *Lenin's Economic Writings*, Lawrence and Wishart.
- Grossmann, H. 1929, *The Law of Accumulation and Breakdown of the Capitalist System*, Pluto Press(1992).
- Harding, Neil. 1977, *Lenin's Political Thought*, Humanities Press.
- Harding, Neil. 1996, *Leninism*, Duke University Press.
- Howard, M.C. and King, J.E. 1989, *A History of Marxian Economics: 1883-1929*, Vol.1, Macmillan.
- Lenin, V. 1893, "On the So-called Market Question", *Collected Works*, Vol.1.
- Lenin, V. 1897, "A Characterization of Economic Romanticism (Sismondism and Our Native Sismondists)", *Collected Works*, Vol.2.
- Lenin, V. 1899a, 『러시아에서 자본주의의 발전 (ロシアにおける資本主義の発展)』, 김진수 옮김 (キム・チンス訳), 태백 (1988).
- Lenin, V. 1899b, "A Note on the Question of Market Theory (Apropos of the Polemic of Messieurs. Tugan-Baranovsky and

- Bulgakov)", *Collected Works*, Vol.4.
- Lenin, V. 1899c, "Once More on the Theory of Realization", *Collected Works*, Vol.4.
- Lenin, V. 1899d, "Reply to Mr. P.Nezhdanov", *Collected Works*, Vol.4.
- Lenin, V. 1899e, "Capitalism in Agriculture—Kautsky's Book and Mr. Bulgakov's Article", *Collected Works*, Vol.4.
- Lenin, V. 1903, 「우리의 강령 초안에 대한 비판에 대하여 (われわれの綱領草案についての批判に答えて)」, 『레닌저작집 (레닌 저작集) 2-1』, 김탁 옮김 (キム・タク訳), 진진.
- Lenin, V. 1906, "Revision of the Agrarian Programme of the Workers' Party", *Collected Works*, Vol.10.
- Lenin, V. 1907, "The Agrarian Programme of Social-Democracy in the First Russian Revolution 1905-1907", *Collected Works*, Vol.13.
- Lenin, V. 1908, "Bellicose Militarism and the Anti-Militarist Tactics of Social-Democracy", *Collected Works*, Vol.15.
- Lenin, V. 1914a, "The Tasks of Revolutionary Social-Democracy in the European War", *Collected Works*, Vol.21.
- Lenin, V. 1914b, "Karl Marx", *Collected Works*, Vol.21.
- Lenin, V. 1915a, "The Collapse of the Second International", *Collected Works*, Vol.21.
- Lenin, V. 1915b, "On the Two Lines in the Revolution", *Collected Works*, Vol.21.
- Lenin, V. 1915c, 『철학노트 (哲学ノート)』, 홍영두 옮김 (ホン・ヨンドウ訳), 논장 (1989).
- Lenin, V. 1916, 『제국주의론 (帝國主義論)』, 남상일 옮김 (ナム・ソン일訳), 백산서당 (1988).
- Lenin, V. 1917a, "Constitutional Illusions", *Collected Works*, Vol.25.
- Lenin, V. 1917b, "The Impending Catastrophe and How to Combat It", *Collected Works*, Vol.25.
- Lenin, V. 1918, 「소비에트 정부의 당면 임무 (ソヴェト政府の当面の任務)」, 백승욱 편 (백·스누크編), 『민중민주주의 경제론: 레닌의 노동자 통제 및 국유화론 (民族民主主義經濟論: 레닌의 노동자統制および国有化論) 1』, 길 (1990).
- Lenin, V. 1919, "Speech at the Joint Session of the All-Russian Central Executive Committee, the Moscow Soviet and All-Russia Trade Union Congress", *Collected Works*, Vol.28.
- Lenin, V. 1920a, "The Tasks of the Youth Leagues", *Collected Works*, Vol.31.
- Lenin, V. 1920b, "The Eighth All-Russia Congress of Soviets", *Collected Works*, Vol.31.
- Lenin, V. 1920c, 『레닌의 경제학 평注』, 木原正雄 譯, 大月書店 (1974).
- Lenin, V. 1921a, "Tenth Congress of the R.C.P.(B.)", *Collected Works*, Vol.32.
- Lenin, V. 1921b, "Tenth All-Russia Conference of the R.C.P.(B.)", *Collected Works*, Vol.32.
- Lenin, V. 1921c, 「현물세 (現物税)」, 백승욱 편 (백·스누크編), 『신경제정책 (NEP) 론: 레닌의 노동자 통제 및 국유화론 (新經濟政策論: 레닌의 노동者統制および国有化論) 2』, 새길 (1991).
- Lenin, V. 1921d, 「신경제정책과 정치교육부의 임무 (新經濟政策と政治教育部の任務)」, 백승욱 편 (백·스누크編), 『신경제정책 (NEP) 론: 레닌의 노동자 통제 및 국유화론 (新經濟政策論: 레닌의 노동者統制および国有化論) 2』, 새길 (1991).
- Löwy, M. 1990, 『연속혁명 전략의 이론과 실제 (連続革命戰略の理論と實際)』, 이성복 옮김 (イ・ソンボク訳), 신평론.
- Marx, K. 1881a, "Marx to Nikolai Danielson", *Collected Works*, Vol.46.
- Marx, K. 1881b, "The Third Draft of the Letter to Vera Zasulich", *Collected Works*, Vol.24.
- Marx, K. 1871, *Theories of Surplus Value*, Part III, Progress Publishers.
- Nove, A. 1979, *Political Economy and Soviet Socialism*, George Allen & Unwin.
- Rees, J. 1998, *The Algebra of Revolution: The Dialectic and the Classical Marxist Tradition*, Routledge.
- Rosdolsky, R. 2003, 『마르크스 자본론의 형성 (マルクス資本論の形成)』, 정성진 옮김 (チョン・ソンジン訳), 백의.
- Service, R. 2001, 『레닌 (레닌)』, 정승현·홍민표 옮김 (チョン・スンヒョン, ホン・ミンビョ訳), 시학사
- Trotsky, L. 1905, 『영구혁명 및 평가와 전망 (永久革命および評価と展望)』, 정성진 옮김 (チョン・ソンジン訳), 신평론.
- Trotsky, L. 1909, *1905*, Vintage Books(1972).
- Warren, B. 1980, *Imperialism: Pioneer of Capitalism*, Verso.
- White, J.D. 2001, *Lenin: The Practice and Theory of Revolution*, Palgrave.
- Zarembka, P. 2000, "Accumulation of Capital, Ist Definition: A Century After Lenin and Luxemburg", *Research in Political Economy*, Vol.18.
- Zarembka, P. 2003, "Lenin as Economist of Production: Ricardian Step Backwards", *Economy and Society*, Vol.67, No.3.
- Žižek, S. 2002, *Revolution at the Gate: Selected Writings of Lenin from 1917*, Verso.

【訳者後記】

本訳稿は、『マルクス主義研究 (마르크스주의연구)』第2号(2004年)に掲載されたチョン・ソンジン(정성진)の論考「レーニンの経済学批判 (레닌의 경제학 비판)」の全訳である。『マルクス主義研究』(編集長:チョン・ソンジン)は、慶尚大学校社会科学院(경상대학교 사회과학연구원)から発行されている理論研究誌で、2003年8月に創刊され、現在(2007年6月)までに7号が刊行されている。第2号は2004年11月に刊行され、「レーニン主義の現在性(레닌주의의 현재성)」という特集を組んでいる。本論文はその特集の中心をなす論考である。

チョン・ソンジンは、慶尚大学校経済学部(경상대학교 경제학과)教授で、「経済と社会」および「現代世界経済論」を講じている。研究論文は数多く、現代の世界経済および韓国経済の分析、経済理論、マルクス主義思想史など、幅広いテーマを扱っている。詳しい情報は以下のホーム・ページから得られる。

<http://nongae.gsnu.ac.kr/%7Eeco/seongjin/>

本論文によって、読者は韓国におけるレーニン研究の水準を知ることができる(ほぼ同時期に日本で社会評論社から刊行された上島武・村岡到編『レーニン 革命ロシアの光と影』と比較することが可能である)とともに、レーニンが受容される場合の、韓国固有のコンテキストについても知ることができるであろう。訳者に対する鋭い批判もあるが、これについては稿を改めて反論する機会もあろう。

翻訳にあたっては、韓国語のニュアンスが感じられるように、直訳的に訳した場合もある。特に、漢字語には現代の日本では使われない表現もあるが、そのまま漢字表記した場合が多い。また欧文資料からの引用も韓国語から重訳した。